また密と記して居ることを注意した、此の協紀辨方書にはウイリ氏の抄出した所よりも詳しき記載がありて、此の名はもと宿曜經に見ゆと記し、また回鶻では日曜を密、波斯では曜森勿、印度では阿爾底耶といふと記してある(Pelliot, ibid. p. 163)、今直接宿曜經について七曜の名の記されて居るものを求めて見ると、これは回鶻としてではなく胡名として、

日曜	密	漢
月曜	莫	雲
火曜	曜	晊
水曜	曜	勿斯
木曜	曜	鶻
金曜	曜	那歇
土曜	曜	枳浣

と見にて居る、金倶叱譯の七曜攘炎決及び宋史律曆志(四)には鶻勿斯が嗢沒斯、那歇が那頡、枳浣が鷄緩となり、また宋史には晊が滴となつて居るが、もとより同音の異譯に過ぎぬ、さて密を初め此等の七曜名については、從來學者は皆之を波斯語と認めたのであつたが、一九〇七年にミューラー氏は Die „persischen" Kalendernausdrücke in chinesischen Tripitaka なる一篇を普魯西學士院の報告に出して、新疆出土のマニ教徒の用ゐた曆を紹介し、これによつて此等の七曜名が波斯語ではなくしてソグド語であることを明らかにした、此の曆は一葉が三行に區劃せられて居るが、左行にソグド語の七曜名を記し、これに對應して中行に支那十干を配し、右行に亞細亞諸國に廣く行はれた十二支を配したものである。さてそのソグド語の七曜名を見ると